

彼岸花

今井美沙子



彼岸花

今井美沙子



筑摩書房

著者略歴

1946年、長崎県五島に生まれる。五島高校卒業。著書に『めだかの列島』(1977年 筑摩書房刊。現在ポプラ社文庫)をはじめ、『おなごたちの恋歌』(筑摩書房)『心は見えるんよ』(凱風社)など多数がある。

彼岸花

©今井美沙子
一九八六

一九八六年八月十日 第一刷発行

著者 今井美沙子

発行者 布川角左衛門

印刷 多田印刷

製本 矢嶋製本

発行所 筑摩書房

東京神田小川町二ノ八
振替東京六一四一二三
電話東京元二六五(営業)
元四一六二(編集)

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

彼岸花・もくじ

序章	ある老カップル	5
一章	働きづめのくらし	13
二章	相寄る魂	56
三章	ゆれる心	88
四章	引き離されて	117
五章	つるる想い	169
六章	老人ホームへの駆け落ち	197
終章	この世の想いに	222
	あとがき	225

彼岸花

装画 佐伯和子

序章 ある老カップル

わしらふたりは

もう、離れようとしても

離れられんとですよ

そりゃあ

世間の人どんから見れば

もう彼岸は目の前にして

愛や恋やもなかじゃろうっち

思いか知らんばってん

そげんことはなか

いくら年ばとってん

好きなもんは好きたい

気持ちは若かときと

ちっとも違わん

笑われてもよか

責められてもよか

こげんして

ふたり一緒に住めるとなら

どげんな非難ば受けてもよか

それほど

ふたりの気持ちは合うちよつと

今年八十三歳の弥吉さんは、思春期の少年のように頬を染めながらも力強くいった。

その横にキチッと正座していた七十七歳のハルさんも初々しい笑顔で相槌を打った。

ふたりは約二十年間の交際のあと、十五年前に市営の老人ホームへ手に手をとって、駆け落ちのような形で入居した。

交際期間をふくめれば、約三十余年、夫婦同然であるが、姓は別々を名のっている。

私がハルさんのことを知ったのは一通の手紙による。

それは五年前にさかのぼる。

その年に出た拙著『ばんばのつぶやき』（サンブライト刊）を読んだ感想と共に、自分の祖母が大変な苦勞をしながらも、明るく逞しく、五島で生き続けているので、その姿を書いて欲しいという内容がしたためられていた。

手紙の字は一字一字丁寧に、単なる思いつきで書いたのではないのはすぐわかった。何日もかかって下書きをし、清書をして出したであらうことがにじみでていた。親子でさえもお互いの生き方が理解できにくい時代にあつて、孫にそれほどの思いを抱かせるおばあさんとはどんな人だろうと私は興味をもった。

ノンフィクションを書き続けているためか、よく、未知、既知の人から、こんなに数奇な運命をたどった人がいる、と本のモデルを紹介される。

その度に何回か会いに行ったことはあるが、実際会ってみると、それほどでもなく、話は立ち消えとなるが多かった。

当事者同士は大変に数奇な運命だと感動しあっている、第三者から見ればそうでもない場合が多い。

けれども、その手紙はなぜか気にかかった。

ちょうど、別の仕事にかかっていたので、即取材というわけにはいかなかったが、是非、あなたのおばあさんにお会いしたいという手紙を私は送った。

ところが、次々に新しい仕事にとりかかり、気にかかりながら三年が過ぎてしまった。

その三年の間には何度も五島へ帰りながら、連絡もしなかった。

手帳には連絡先の電話番号をひかえていながら……。

そしておとしの夏、やっと私はその手紙の主に電話した。

手紙の主は四人の子持ちの男性であった。

次の日会った彼は、誠実な人柄を思わせた。

「まさか手紙の返事をもらえらと思わなかったのに返事をもらって、おまけにこんなに会えて……」

とその男性は喜んで、おばあさんの所へ案内するといった。

私はその男性について歩いた。

歩いている途中、その男性は唐突にいった。

「ばあちゃんは老人ホームにおつとですよ。よそんじいちゃんと一緒に……」

「えっ？」

「ばあちゃんの主人は早うに亡くなって、それから、よそんじいちゃんと好き同士になって、老人ホームに手に手ばとつてふたりで入ったとですよ」

「……」

「びっくりしたでしょ。まあ、駆け落ちというか……」

「籍は入れてるんですか？」

「いや、早くいうたら、同棲ですよ」

「えっ？ 何歳と何歳？」

「えーと、八十三と七十七かな。ふたりが一緒になるについては、いろんな中傷や誤解があったけど、孫の僕は、ふたりがよければいいと思っとつとですよ」

こともなげにいった。

私は大変な苦勞をしたと手紙に書いてあったので、ひとり暮らしのおばあさんと想像していたが、ひとりどころか、その年で、まだまだ熱い思いを抱いて生きているおばあさんだと知らされて、面喰らった。

「すごい情熱家のおばあさんでしょ？」

圧倒されるような思いできくと、

「いや、おとなしい人ですよ」

と答えた。

やがて、木造の老人ホームに着いた。

面会簿に名前と系累と目的を記し、一番奥の部屋へ行った。

その男性が私が来た目的を告げると、ふたりは戸惑いもせず、にこにこ迎え入れてくれた。そして、弥吉さんは、

「わしらふたりは

もう、離れようとしても

離れられんとですよ……」

と冒頭のことばをいった。

ふたりの姿はほえましかった。

思わず拍手をしたいほどであった。

私は一瞬のうちに、ふたりの世界へ入りこんでしまったことを感じた。

それから時間をみつけては五島へ飛んだ。

いつ伺ってもふたりはにこにこ至福の笑顔で迎えてくださった。

時にはお孫さんたちの来訪とぶつかることもあった。

弥吉さんの方の孫だと、ハルさんがそとホームを出て、近くの菓子屋さんへ買い物に行き、

エプロンのすそを持ち上げて帰って来た。

エプロンの中には、種々様々のお菓子が入っていて、さあ、「持って帰りなはいよ」と持た

せていた。

籍は入ってなくても、もう両方の身内がふたりの仲を認めていることはわかった。

私はふたりの話を、了解を得てテープにおさめて帰っては、五島の老母にきかせた。

十六年前に未亡人になった老母は、弥吉さんの、「ふたりは離れられんとですよ」を聞くと、

声を立てて笑った。

「あらよ、よかねえ、年ばとってでん、こげん気持ちがきれいで若かじんじ（おじいさん）とばいば（おばあさん）もおるとじやねえ。よかねえ。かあちゃんも、これから、よかじんじでも

見つけようか」

と冗談をいい出すのであった。

それから母は、母の友人たちに会々と、弥吉さんとハルさんの話を好意をもってしていた。すると、その話をきいたどのばんばたちも、

「よかねえ。見習いたかねえ」

と祝福と羨望のことばを贈るのだった。

私もまた、大阪へ帰って、若い友人から年をとった友人にまで、ふたりのことをしゃべった。「いやあ、いいわ。年をとるのも、まんざらじゃないわ」

「そのふたりに会いたいわ」

の感想のあと、「早く一冊にまとめてね」と励まされた。

会う度に一冊にまとめた気持ちは強くなっていったが、三十代の私が、七十代、八十代の心情にどこまで近づけるか自信がなく、取材をくり返し、書き出しはするのだが、その原稿は反古の方が多かった。

「美沙子さん、あまりにきれいごとすぎて大人の童話になったら駄目よ」
と年かさの友人が忠告してくれた。

書いている最中にこれほど友人から反響のあった本も珍しい。

「今、どこらへんまで」

ときかれると、私は詳しく説明する。

説明しているうちに、自分の頭の中がだんだん整理されていく。

質問や反論や忠告が飛びかい、その中で、私は少しずつ成長していった。

併行して、ふたりの関係者にも会い、だんだんと取材の内容がふくらんでいった。

ふたりは特別の人たちではない。

どこにでもいる、ふつうのおじいさんとおばあさんである。

そのふつうのおじいさんとおばあさんが、自分たちの気持ちに正直に生きてきた姿を私は書いて残したかった。

何歳になろうが人を恋する気持ちには変りはないことを私はまのあたりにして、老いることがそんなに恐らくなかった。

ふたりの歩みに、歩調を合わせて、読み進んでいただけたらと、願う。

一章 働きづめのくらし

ハルさんは明治三十九年（一九〇六年）に九人きょうだいの長女に生まれたので、幼いころから苦勞が絶えなかった。

小学校は一応六年間通ったが、背中には、いつも、次々に生まれた、弟や妹をおんぶしていた。

うんこをした、おしっこをしたといつては、教室を出なければならなかったので、落ち着いて勉強はできなかった。

父は漁師であつた。

母は父のとつてきた魚の加工を手伝うかたわら、畑仕事もあつたので、ハルさんが全面的に子守りを引き受けた。

大正時代のこの島の人たちの常食は、米や麦ではなく、イモとカンコロ（干しイモ）という貧しさであった。

田んぼはあることはあっても、わずかなので、盆や正月などの晴れの日にしか口にすることはできなかった。

女たちは、イモの収穫と保存に心を配っていた。

どの家にも床下にはイモを保存する大きな穴があった。

イモの収穫時には、イモをかがり（わらで編んだ袋）に入れて、おこ（天秤棒）で担いで、畑と穴の間を何往復もした。

かがりで二百杯、三百杯と穴に入れ、上に傷がつかないようにわらをかぶせて保存するのだった。

「イモは傷がついたら最後、痛みが早かけん、わらですたい。魚は竹かごじゃばってん。ほんと、イモのできるじぶんには、男もおなごも重労働ですたいね。じゃけん、大きな子は子守りばして親ば助けるとですたい」

物心ついてからずっと、ハルさんの背中には赤んぼがいた。

「ハルよい。背中に赤子ばかりくくりつけられちゃったら、背が伸びんぞ。たまには、赤子ば置いてのびのびと走り回らんばよ」

隣近所の人が、見かねて声をかけてくれた。

はたからはつんだひか（可哀相）といわれたハルさんであったが、けっこう自分の楽しみは